

は じ め に

北海道麦作共励会は、今年で39回を数えることとなりました。この間、関係各位の皆様には絶大なご支援、ご協力をいただいております。ここに厚くお礼申し上げます。

本年の第1回審査委員会（委員長：北海道農業研究センター川口健太郎作物開発研究領域長）を8月6日に開催し、開催要領、審査基準、推薦調書について検討を行い、本年の北海道麦作共励会の取り組みを決定しました。その後、審査委員会の決定を踏まえ、8月20日付けで各地区協会に開催案内を行い、関係機関・団体に、後援依頼と参加推進をお願いしました。

平成30年産の秋まき小麦は、10a当たり収量422kgで前年対比79%、平年対比でも88%と下回りました。

春まき小麦では、10a当たり収量208kgで前年対比69%、平年対比でも65%と大きく下回りました。

全道の収穫量は、約47万トン、当初約54万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比89%の収穫となりました。作付面積は、約12万haで前年対比100%でした。

一方、品質面では秋まき小麦の1等麦比率が約80%となり、平成28年に次ぐ低い割合となりました。また、基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分では、地域間差はあるもののタンパク含有率を除き外はクリアできました。

秋まき小麦の収量が平年を下回った要因として、出穂期以降の降雨と日照不足が大きく影響し、加えて成熟期の高温により登熟が急速に進み、細麦傾向になったと思われます。

また、春まき小麦では、成熟期以降の降雨と最低気温が低く穂発芽や低アミロの被害を受け1等麦比率では45%となりました。

秋まき小麦では、全道的に平年を下回る作柄となったものの関係者の協力で今年度は6点の出席となりました。6点の内訳は、第1部（畑地における秋まき小麦）個人で2点、同集団で2点。第2部（水田転換畑における秋まき小麦）個人で1点。第3部（全道における春播き小麦）個人で1点でした。

11月5日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考し、12月6日までに現地調査を行い、正式に各賞を決定しました。

本報告書は、最優秀受賞者の麦づくりと経営概要をまとめたものです。作成に当たって、川口審査委員長に審査報告をお願いし、関係地区の審査委員はじめ農業改良普及センター、農協の関係各位に最優秀受賞者の概要をまとめていただきました。本報告書が皆さんの麦づくりや経営改善の一助になることを願っております。

最後になりますが、本年の麦作共励会の実施にあたり、ご協力いただいた関係各位の皆様に対し、あらためて心からお礼申し上げます。

平成31年2月15日

一般社団法人 北海道米麦改良協会